30、ことば

30-1 科学上の真理は、つねに逆説なのである。
「科学上の真理は、物事のまぎらわしい外観しかとらえない日常の経験から判断すれば、つねに逆説なのである。」③-[320]

30-2 なにごとも初めが困難だということは、
「なにごとも初めが困難だということは、どの科学の場合にも言えることである。」③-[321]

30-3 経済学の取り扱う素材の独自の性質は、
「経済学の取り扱う素材の独自の性質は、…私的利害というフリアイ*を、戦場に呼びよせる。」＊ギリシャ神話で、頭髪がへびであった三人姉妹の復讐の女神。③-[322]

30-4 科学的批判によるいっさいの判断を私は歓迎する。③-[323]

30-5 学問に平坦な大道はありません。③-[324]

30-6 一つの科学の新しい見解は、…
「…一つの科学の新しい見解は、すべてその科学の術語における革命を含んでいる。」③-[325]

30-7 人間は、宗教では自分の頭の作り物に支配されるが
「そこでは労働者が現存の価値の増殖欲求のために存在するのであって、その反対に対象的な富が労働者の発展欲求のために存在するのではないという生産様式では、そうであるよりほかはないのである。人間は、宗教では自分の頭の作り物に支配されるが、同様に資本主義的生産では自分の手の作り物に支配されるのである。」(大月版『資本論』P810~811)

30-8 あらゆる種類の魅力ある泡沫企業への無謀な投機
「繁栄が興奮に移行し、一方では過度の輸入取引、他方ではあらゆる種類の魅力ある泡沫企業への無謀な投機が確実に始まる」、…「興奮は繁栄の絶頂なのだ。それが恐慌を生みだすわけではないが、恐慌勃発のきっかけをつくるのである。」(マルクス『受救貧困と自由貿易――迫りくる経済恐慌』『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』1852.11.1付)

30-9 この世のなかで腐敗したものは、すべて、それだけの理由があって腐敗したのである ヘーゲル『哲学体系』、第一部、『論理学』からの引用。(大月版『**資本論**』① P344)

30-10 われ亡きあとに洪水はきたれ！
「この言葉は、宮廷で宴会やお祭り騒ぎばかりをやっていればその結果はフランスの国債

がふえるばかりだという忠告を受けたときに、ポンパドゥール侯夫人が言ったものだといわれている。」（大月版『**資本論**』① P353、注解 P15（79））

30-11 ジャガノート　（「資本のジャガノート車の下敷き」）
「ヒンドウー教の最高の神々の一人であるヴィシュヌ神がとる姿の一つ。ジャガノート礼拝は非常に立派な祭礼や極端な宗教上の狂信によって有名であり、この狂信は信者の難行苦行と自己犠牲とに表現されていた。大祭の日に信者たちは、ヴィシュヌ神＝ジャガノートの肖像をのせた車の下に身を投じたのである。」（大月版『**資本論**』①P368、注解 P16（85））

30-12 「無知は十分な根拠になる」
　スピノザはその著作『倫理学』第一部の付録のなかで、無知はけっして十分な論拠とはならないということについて述べたが、それは坊主的＝神学的な自然観の代表者たちに反対して言ったのであって、彼らは「神の意志」がすべての現象の究極の原因であると主張したが、そのための彼らの唯一の論拠は、それ以外の原因はわからないということでしかなかったのである。（大月版『**資本論**』①P404、注解 P18（101））

30-13 どろぼうが二人で喧嘩すれば必ず良いことが起きる
「どろぼうが二人で喧嘩すれば必ず良いことが起きる、というのはイギリスの古いことわざである。」（**大月版**『**資本論**』②P881B4-3）

30-14 社会的理性が事後になってからはじめて発現するのを常とする資本主義社会
　（大月版『**資本論**』③P385B6-5）

30-15 同じ貨幣が売り手の手の中では買い手の手の中にあるときとは違った用途に役だつということは、どの商品売買にもつきものの現象である。（資本家の手の中では搾取の手段として、労働者の手の中では生活の手段として。）（大月版『**資本論**』③P454-455）

30-16 現実にあるものは、いつでもただ近似だけである。
　（大月版『**資本論**』④ P221F8）

30-17 大盗は小盗を絞（くび）る
「『あなたのつかさたちはそむいて、盗びとの仲間となり、というイザヤ書第一章の言葉に従え。彼らは、一グルデンか半グルデンを盗んだ盗びとを絞（くび）らせながら、全世界から略奪する盗賊の仲間になっていたどんな盗びとよりもたくさん盗むのであって、じつに、大盗は小盗を絞（くび）るという諺は今でも真実なのである。また、ローマの元老院議員カトーが言ったように、小盗は獄につながれ枷（かせ）をかけられるが、公盗は黄金や絹をまとって歩くのである。しかし、最後に神はこれにたいしてなんと言うであろうか？神は、エゼキエルに語らせているとおりに行なうであろう。すなわち、一つの都市が燃えてもはや君主も商人もなくなってしまうように、神はこの盗びともあの盗びとも鉛と青銅とのように溶け合わせてしまうであろう。』」（マルティーン・ルター、商取引と高利とに関する書。1527 年のも

の)」(大月版『資本論』 ④ P413B6-414F1)

参考「もしーかけらのパンをぬすめば監獄につながれるが、鉄道をぬすめば上院議員に任命される」というアメリカのことわざ。(レーニン全集 第 17 巻 P128)

30-18 偶然的であり純粋に経験的なものについて――ただ衒学または妄想だけがこの偶然性を必然的なものとして説明しようとすることができるのである。

(大月版『資本論』④ P454F4-6)

30-19 内的な関連から疎外された、それだけとして見ればばかげたものである現象形態のなかで、彼らは水中の魚のように気安さを覚えるのである。

常識が不合理と見るものは合理的なものであり、常識で合理的なものは不合理そのものであるということがあてはまるのである。

「剰余価値の一部である貨幣地代――というのは貨幣は価値の独立表現だからである――の土地にたいする割合というものは、それ自体ばかげており不合理である。なぜならば、ここでお互いに計算の基礎になるもの、すなわち一方の側にある一定の使用価値、何平方フィートかの地所と、他方の側にある価値、詳しくは剰余価値とは、比較できない量だからである。……とはいえ、一定の経済的諸関係がそのなかに現われそのなかに実際に総括されるところの不合理な諸形態の媒介は、日常取引でのこの諸関係の実際上の担い手たちにはなんのかかわりもないのである。また、彼らはそのなかで動くことに慣れているので、彼らの理性はそれにたいして少しも衝突を感じないのである。完全な矛盾でも、彼らにとっては少しも不思議なところはないのである。内的な関連から疎外された、それだけとして見ればばかげたものである現象形態のなかで、彼らは水中の魚のように気安さを覚えるのである。ここでは、ヘーゲルがある種の数学の公式について言っていること、すなわち、常識が不合理と見るものは合理的なものであり、常識で合理的なものは不合理そのものであるということがあてはまるのである。」(大月版『資本論』⑤ P998B1-999B6〉

※「資本主義社会での事物の認識 9-3」にも掲載ずみ。

30-20 ブルジョア世界のなかに、ありとあらゆる世界のうちの最良の世界を発見しようとする親切な善意が、俗流経済学では、真理愛や科学的探求欲のどんな必要にもとって代わるのである。

(大月版『資本論』⑤ P1080B2-1081F1)